

文章を読む 1 1

前回の続きです。(x)は最初の^偽だけ読めれば、次の4文字



は「奉願上候」(願^{ねが}い^あげ^{たてまつ}奉^{そうろう}り^候)と、何
度目かの決まり文句です。問題の^偽ですが、

「イ」はわかるとして、^{つくり} 1 に目がいつ
て「偽」?とってしまうかもしれません。

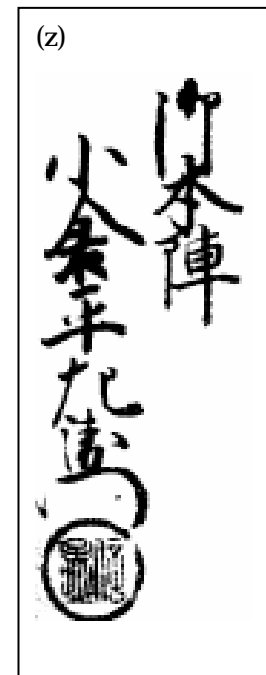
しかし、よく見ると^扁という感じで書かれ
ていますので、これは「扁」という字の崩しで、「偏」という字です。読
み方は「ひとえに」と読みます。古文書をやっている、普段よく使う言
葉にそういう漢字を使うのか、と発見することがよく
あります。これ以外にも「態」(わざわざ)「愈」(い
よいよ)「悉」(ことごとく)なども出てきます。

さて、(x)の最後の2文字は「以上」です。

(y)の部分は、この願書を出した日付で「天保七申年
十二月」とあります。「申(さる)」は干支です。

(z)は差出人で、「御本陣」とあります。本陣とは宿場町の中で大名な

どが宿泊する所です。名前の部分は最初が「小」。次の^余はやや難
しいですが、「倉」。次の「平」はそのままで、最後の3文字は「左衛門」
です。まとめると「小倉平左衛門」となり、こ
れは府中宿(静岡市)の本陣を勤めた家です。



(z)

この願書の宛先は(右上には載せませんでしたでしたが横に載せました)
「土井鏈之助様 御役人衆 中様」とあり、土
井鏈之助は駿府加番(二加番)という駿府城外
の警備を担当した役職に就いていた旗本(徳川
家の家臣)と考えられます。

この中で^衆(「衆」)という字はとてもよく
出てきますので、ここで覚えてください。

以上、文章を1つ読むことができました。もう少し
慣れていただくために、同じくらいのレベルの
ものをまた読んでいきます。その前に、次回は
少し数字の読み方をやることにします。

